

1.長岡宮跡第489次(7ANBMC-11地区)・ 南垣内遺跡発掘調査報告

1.はじめに

この調査は、府道上久世石見上里線地域自主戦略交付金(交安)事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査対象地は、標高26.3～27.0mを測る段丘低位面の谷部に位置する。長岡京条坊復原によれば、長岡宮北辺官衙(北部)の西部に位置する(第2図)。南側には、北一条条間南小路の宮内延長道路が推定されている。長岡京以外の遺跡としては、西側に7世紀の創建とされる宝菩提院廃寺が想定されている。東側には物集女街道沿いに発展した中世集落南垣内遺跡(鎌倉～江戸時代)が広がっており、調査地は同遺跡の北西側に位置する。また、周辺には「古城」という地名が残っており、調査地南側には江戸時代末期の地籍図に「御城ノ内」という小字名がみられることから、14世紀前半頃に築かれた竹田氏の居館である寺戸城(50m四方)の存在が推定されており、その北辺中央部付近にも相当する。また、この地籍図には、調査地北辺を東西に流れる水路が記載されている。

調査地周辺では、宮跡第106・126・241・305・319・358・421・461・463・473次調査が行われている(第2図)。宮跡第241次調査では、縄文時代後期～弥生時代中期の遺物を包含する流路跡が、宮跡第305次調査では弥生時代～古墳時代の流路、中世の井戸・柱穴が検出されている。宮跡第421次調査では古墳時代の流路、長岡京期の東西溝、平安時代の掘立柱建物、中世の柱穴群・溝が確認されている。調査地東側の宮跡第473次調査では平安時代前期の溝、中世以降の土坑・柱穴が確認されている。宮跡第461次調査では中世の柱穴・溝等が検出された。宮跡第358次調査では中世から近世にかけての柱穴群と近世溝が、西側の宮跡第463次調査では近世の流路が確認された。これらの調査成果から、今回の調査地では縄文時代から平安時代と中世以降の遺構の検出が期待された。

本報告で使用した国土座標は、日本測地系第Ⅵ座標系である。現地調査ならびに報告については、京都府教育委員会、向日市教育委員会、公益財団法人向日市埋蔵文化財センターをはじめ関係各機関、地元自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府乙訓土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保

同 主任調査員 増田孝彦

調査場所 向日市寺戸町南垣内地内

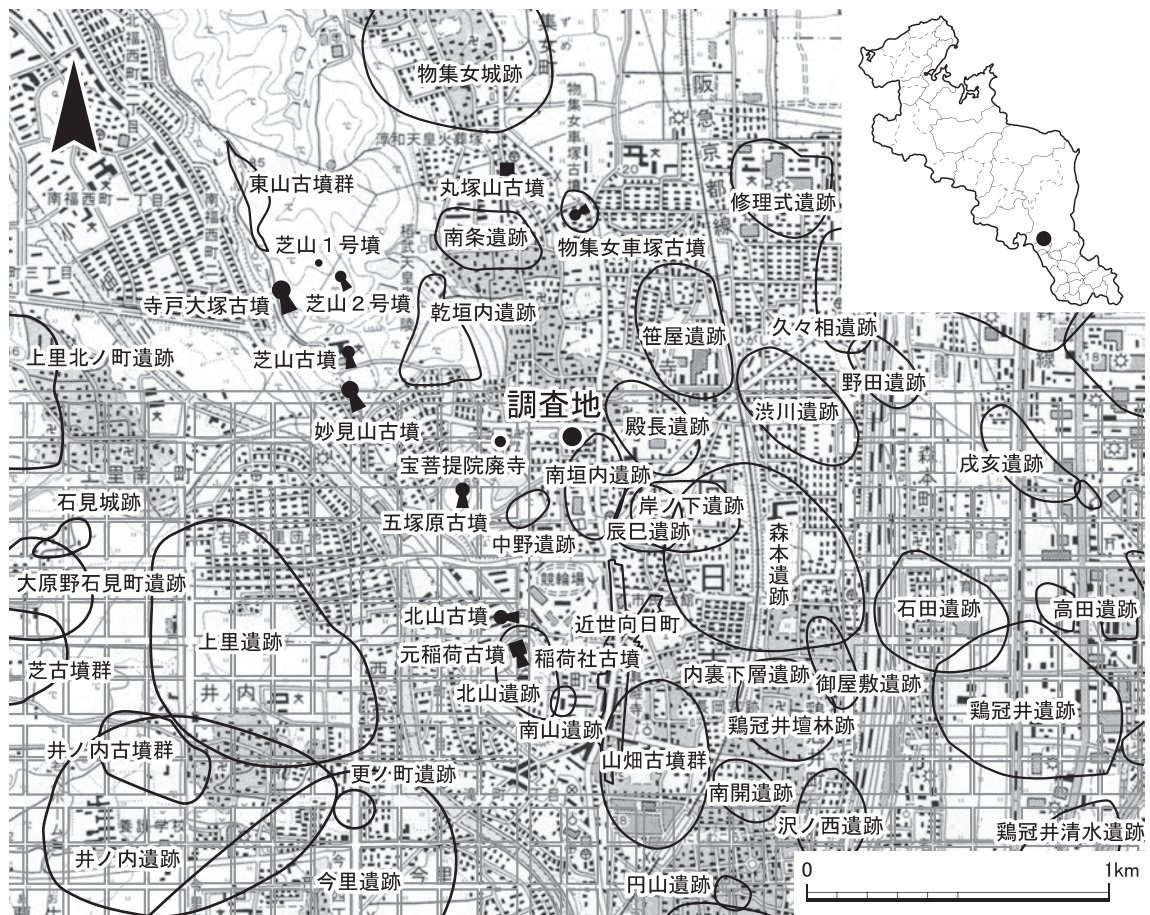
現地調査期間 平成24年5月17日～6月30日

調査面積 80㎡

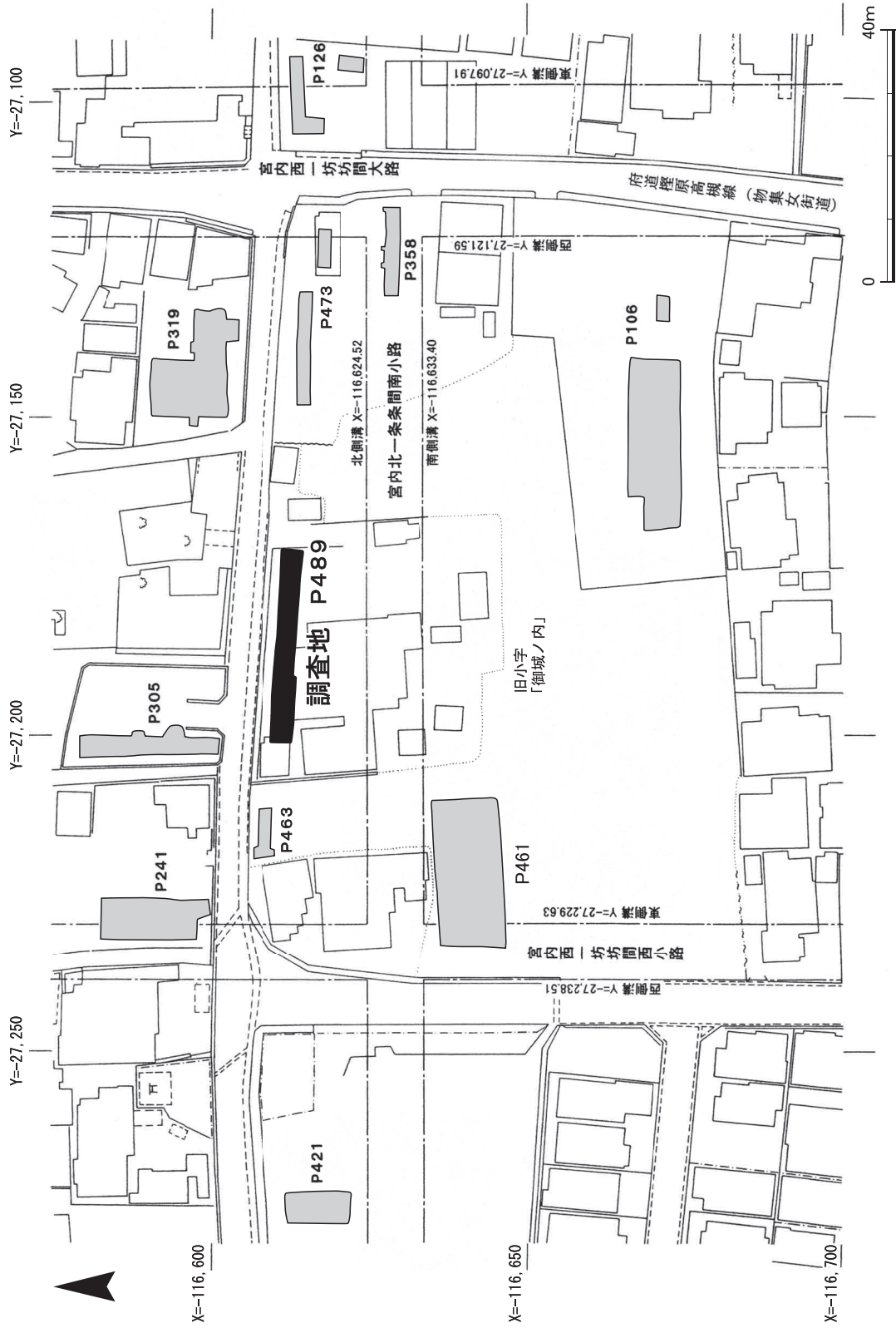
2. 調査概要

調査地は住宅跡地であり、住宅建設に伴う盛土が約1.0m施されていた。対象地の北側には盛土に伴うコンクリート擁壁が東西約37m存在していたが、今回の調査着手前に道路用地とするため除去されている。このコンクリート擁壁部分は仮歩道として使用されていたため、それを避けて南側にトレンチを設定した。調査は、土砂置場と排水の浄化用水槽を設置する関係上、調査対象地を東西に2回に分けて掘削した。

調査地の基本層序は、トレンチ西壁(第3図、図版第2)では第1層は家屋・コンクリート擁壁解体時の攪乱で、西から東に傾斜している。第2・3層は住宅建設に伴う盛土で、第1層に部分的に削平を受けるが、褐色系の粘質土・礫混じり粘質土、灰色系粗砂礫で構成されており、南側の高位側の土砂を削り、北側に整地したものである。これを除去すると、上層遺構の溝 S D01 検出面である第4層淡黒灰色砂質土となる。西壁では溝 S D01 は新旧の掘形が認められる。トレンチ西半部は谷地形となっており、南西・西方向からの流れ込みによる堆積が認められる。中央部

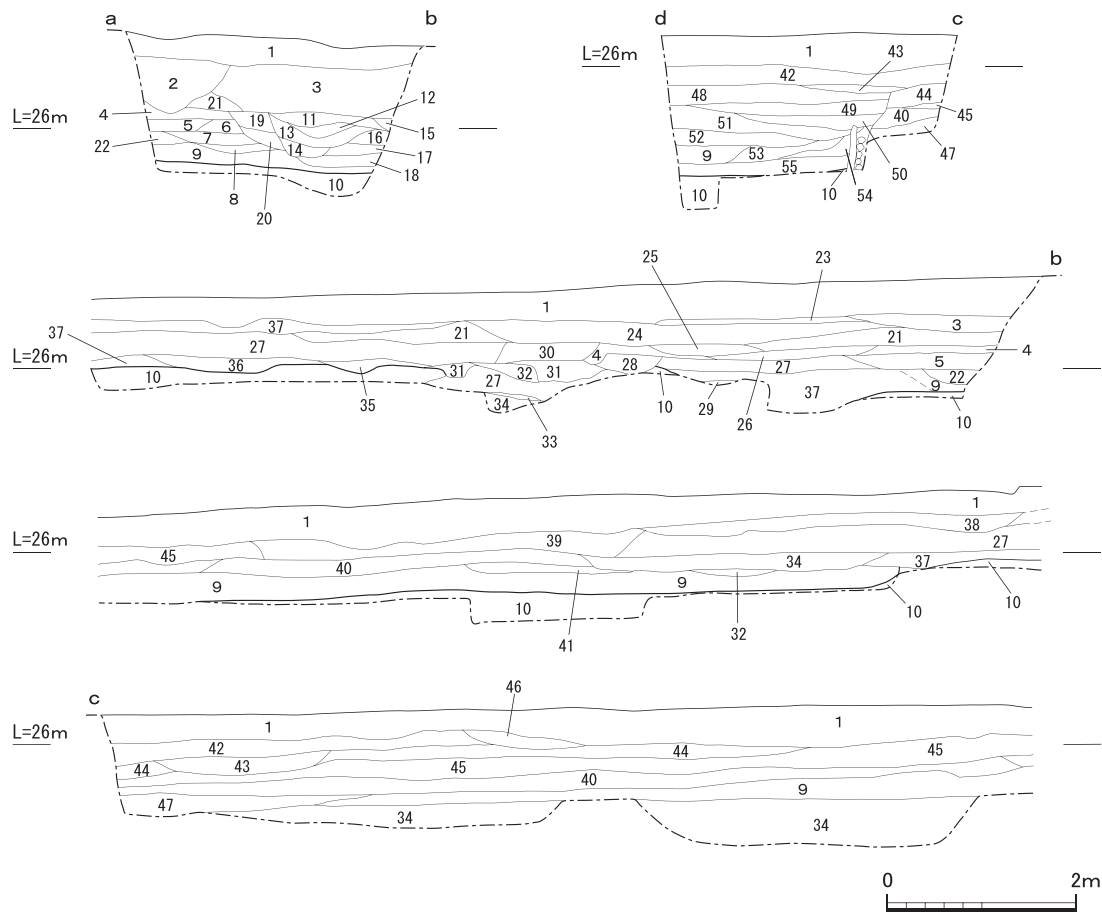


第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



向日市埋蔵文化財調査報告書第 83 集より転載加筆

第 2 図 調査地周辺図



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色土+黄褐色粘質土(家屋解体時の攪乱、礫多く含む) 2. 暗黄灰色礫混じり粘質土(攪乱) 3. 褐色礫混じり粘質土(盛り土、遺物多く含む) 4. 淡黒灰色砂質土 5. 淡褐色砂 6. 褐色礫混じり砂土(1~5cm) 7. 茶褐色粗砂(酸化物、灰褐色粘質細砂含む) 8. 暗褐色砂 9. 褐色粗砂礫 10. 黄褐色礫混じり粘質土(地山) 11. 暗褐色礫混じり粘質土(1~5cm、礫・遺物多い) 12. 暗褐色礫混じり粘質土(3~10cm、礫やや多い) 13. 暗灰褐色(灰黄色砂混じり)礫混じり粘質土(炭混じり、4~10cm、礫少ない) 14. 灰褐色砂土(炭混じり) 15. 暗茶灰色砂(酸化物混じり) 16. 暗灰色礫混じり粘質砂(1~5cm、礫少ない) 17. 暗灰褐色粗砂礫(1~4cm、礫少ない) 18. 暗灰褐色粗砂礫混じり砂土(1~10cm、礫多い) 19. 13に比べて礫少なく酸化物が多い 20. 灰褐色砂土(炭混じり)に礫が混じる(1~7cm、礫少ない) 21. 褐色土(土器多い) 22. 灰褐色粘土混じり淡褐色粗砂 23. 淡灰褐色粘質土 24. 淡灰褐色粘質土+暗褐色土 25. 暗褐色粘質土(酸化物混じり) 26. 褐色砂質土(土器混じり) 27. 淡褐色砂(5よりも礫大きい) | <ol style="list-style-type: none"> 28. 暗灰褐色+灰褐色礫混じり粘質砂(炭混じり) 29. 暗灰褐色粘質土 30. 淡黄灰色粗砂混じり粘質砂 31. 淡黄灰色粘質砂 32. 褐色砂 33. 明黄褐色粗砂(酸化物層) 34. 淡黒灰色粗砂混じり土 35. 茶褐色粗砂礫混じり土(1~2cm) 36. 暗茶褐色粗砂礫混じり土(1~2cm) 37. 灰褐色粗砂礫(1~10cm) 38. 褐色礫混じり粘質土 39. 暗灰褐色礫混じり砂質土(1~5cm、礫少ない) 40. 暗褐色砂質土(遺物含む) 41. 暗灰色砂(遺物含む) 42. 褐色礫混じり粘質土 43. 暗黄褐色粘質土 44. 暗茶褐色粘質土 45. 淡黒灰色粘質土 46. 茶褐色砂 47. 茶褐色粘質砂土 48. 暗褐色礫混じり土 49. 暗灰褐色礫混じり粘質土(5cm、礫少ない) 50. 灰褐色礫混じり粘質土 51. 暗灰褐色(黄褐色粘土混じり)泥土 52. 黒灰色粗砂礫混じり泥土(棧瓦混じり) 53. 暗褐色粗砂 54. 黒灰色粘質土(泥土) 55. 淡黒灰色砂礫混じり泥土 |
|---|---|

※土層の位置は第4図参照

第3図 トレンチ西壁・東壁・南壁断面図

より東側は整地に伴う堆積(第9・47層)となっている。

下層は、トレンチ西半部では地山(第10層：黄褐色礫混じり粘質土)が大きく削られ、遺物を包含する南西・西方向からの砂礫が堆積する(第5・6・22・26～29・31～37層)。遺物は細片化しているが、極端な磨滅を受けたものがないことから、周辺から流入したものと考えられる。トレンチ東半部では、地山面は安定しており、自然地形の窪みに砂礫が堆積し、その上に整地層である第9層(褐色粗砂礫)が堆積する。

3. 検出遺構

トレンチ西半部では、上層遺構としてトレンチ北端を東西に延びる溝 S D01-1の南側肩部を、その南側で旧溝 S D01-2南肩部の一部を検出した。また、溝 S D01-1の南側において浅い溝2条、土坑3基、柱穴4基を検出した。下層遺構はなかった。

トレンチ東半部では、上層遺構として東端で木・竹杭で補強した土坑 S K11、中央部分を西から東に延びる溝 S D01-1を検出した。下層遺構として、北北西より東に延びる溝 S D12の南肩部と橋脚の可能性がある柱穴 S P13を検出した。

1) 上層遺構

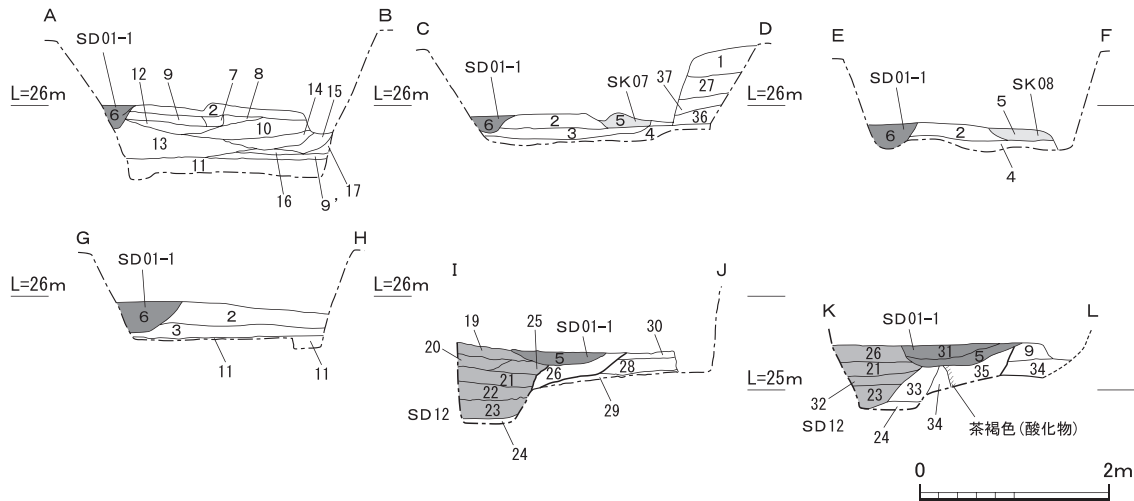
溝 S D01-1・2(第4・5図、図版第1～3) 削平を受けた整地土である淡黒灰色砂質土(第4層)の上面で検出した。新旧2条の溝が重なっており、新しい溝を S D01-1、古い溝を S D01-2とした。S D01-1の埋土は第3図第11～14層、S D01-2の埋土は第3図19・20層である。S D01-1は西壁では幅1.1m、深さ0.3mを測る。トレンチ中央部までは北壁に沿って南肩を検出したが、中央部から東側では溝全体がトレンチ中央付近を通っている。東端は土坑 S K11に切られる。東端での規模は幅1.2m、深さ0.24mを測る。方向からするとこの溝は北壁に沿って流れていた溝からトレンチ中央付近で分流した溝とも考えられる。北壁に沿った部分は14m、分流と考えられる部分は13.6mである。溝内からは棧瓦とともに多くの遺物が出土した。S D01-2は、幅1.6m以上、深さ0.6mを測る。トレンチ西端から東に2.5m分を検出しており、その延長部分は北側の調査地外に延びるようである。調査地の西側10mの地点で行われた宮跡第463次調査では近世流路が検出されており、方向的にはこれに繋がるものと考えられる。

溝 S D05(第4図、図版第1) トレンチ中央よりやや西側で検出した。東側を柱穴および土坑 S K03に切られる。検出長2.8m、幅0.2～0.25m、深さ4～8cmを測る。埋土は暗茶褐色粗砂礫混じり土で、土師器小片とともに須恵器甕(第7図4)が出土した。

土坑 S K03(第4図、図版第1) トレンチ中央よりやや西側の南壁付近で検出した。西側を柱穴に切られる。検出長1.3m、幅1m、深さ13cmを測る。須恵器椀(第8図22)が出土した。

土坑 S K07(第4図、図版第1) トレンチ西側の南壁付近で検出した。土坑とするよりも溝に近いが、土坑を想定して掘削を行ったためそのまま表記している。埋土は第5図第5層である。検出長6.25m、幅0.18～0.55m、深さ12.5cmを測る。須恵器椀(第8図23)が出土した。

土坑 S K08(第4図、図版第1) トレンチ中央南壁付近で検出した。西側を S K03に切られ、



- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 褐色+黄褐色粘質土(家屋解体時の攪乱)</p> <p>2. 暗茶褐色砂礫(遺物包含層、整地土)</p> <p>3. 灰褐色砂礫</p> <p>4. 黄褐色砂礫混じり粘質土(地山)</p> <p>5. 暗褐色粗砂礫(礫3~15cm、多い)</p> <p>6. 暗灰褐色礫混じり粘質土(礫1~15cm、多い、SD01-1埋土)</p> <p>7. 暗灰黄色粘質土</p> <p>8. 茶褐色砂</p> <p>9. 灰褐色粗砂</p> <p>9'. 8よりも粗い砂</p> <p>10. 淡灰色砂+灰褐色礫(礫1~5cm、やや多い)</p> <p>11. 灰褐色粘質土(砂混じり、地山)</p> <p>12. 淡灰褐色砂</p> | <p>13. 茶褐色粗砂礫(礫1~10cm)</p> <p>14. 灰褐色砂</p> <p>15. 褐灰色粗砂</p> <p>16. 黒色酸化物混じり粗砂</p> <p>17. 黄褐色砂</p> <p>18. 暗灰褐色(灰黄色砂混じり)礫混じり粘質土(礫4~10cm、少ない、炭混じり)</p> <p>19. 褐色粘質砂</p> <p>20. 淡黄褐色粘質砂</p> <p>21. 灰褐色+茶褐色砂混じり粘質土(泥土)</p> <p>22. 暗褐灰色粗砂</p> <p>23. 灰褐色粗砂礫(礫1~5cm)</p> <p>24. 灰白色粘質土(地山)</p> | <p>25. 茶灰色粘質砂(泥土)</p> <p>26. 淡黒灰色礫混じり粘質土(礫1~10cm)</p> <p>27. 淡褐色砂礫</p> <p>28. 褐色粗砂礫</p> <p>29. 黄褐色粗砂礫(地山)</p> <p>30. 暗褐色砂質土(遺物含む)</p> <p>31. 褐色礫混じり粘質土(SD01-1埋土)</p> <p>32. 褐灰色粘質砂土(泥土)</p> <p>33. 暗灰褐色礫混じり粘質砂土(礫3~7cm、泥土)</p> <p>34. 暗灰色粘質砂(護岸杭)</p> <p>35. 淡褐色礫混じり砂質土(礫1~10cm、少ない)</p> <p>36. 黄褐色礫混じり粘質土</p> <p>37. 灰褐色粗砂礫(礫1~10cm)</p> |
|---|---|---|

第5図 断ち割り断面図

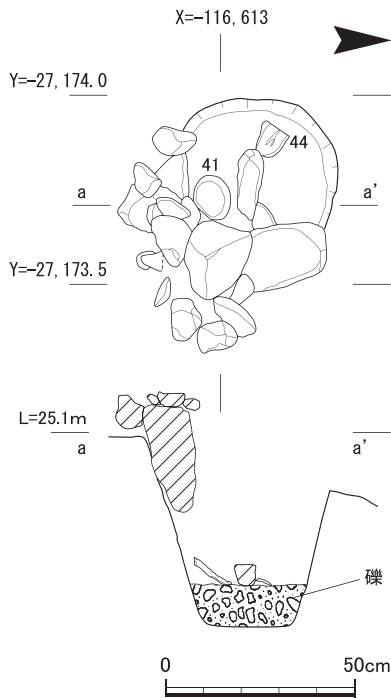
大半が調査地外となる。検出長3.3m、幅0.7m、深さ13~18cmを測る。黒色土器碗(第8図21)、須恵器碗(第8図24)が出土した。

土坑SK11(第4図、図版第3) トレンチ東端で検出した。平面は方形を呈し、野壺ないし水溜と考えられる。西辺と南辺の一部のみ確認した。掘り込み側壁には0.2~0.4m間隔で竹・木杭を打ち込み、側壁との間に真竹を横に渡し矢板とする。南北検出長2.2m、東西検出長1.5m、深さ1mを測る。埋土は礫混じりの粘質土・泥土(第52~55・9層)で、多くの棧瓦とともに細片化した土師器・須恵器・磁器片が出土した。土層の堆積状況から近代以降と考えられる。道路の脇に設置されたものであろう。

柱穴SP04(第4図) SK07と重複して検出した。直径0.56m、深さ19.3cmを測る。斜格子タキを施す平瓦(第12図67)が出土した。東に隣接して同様の柱穴を検出した。

2) 下層遺構

溝SD12(第4図、図版第4) トレンチ中央よりやや東側から東端に向かって流れる溝である。溝の南肩部のみ検出したもので、東端は土坑SK11に削平される。検出長10.6m、幅1.4m以上、深さ65cmである。埋土は粘質土、砂質土を中心とする(第5図第19~26・32層)。最下層は灰褐色粗砂礫で水が流れた痕跡が確認される。溝の東部には直径5~7cm程の木杭と真竹を杭



第6図 柱穴S P13実測図

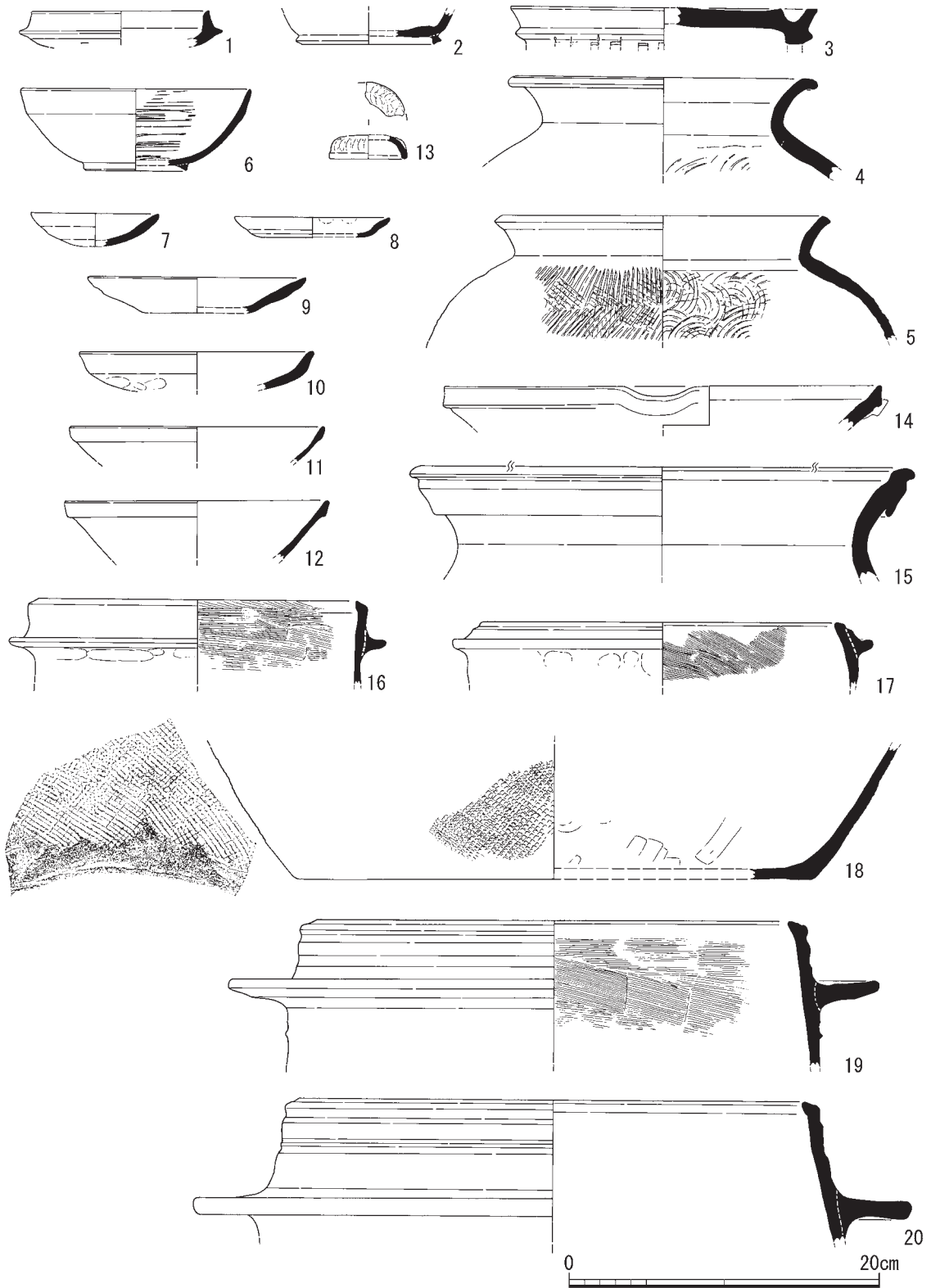
とした護岸施設を確認した。杭間の距離は0.2～0.7mを測り、裏込め石等は確認できなかった。この護岸施設の南側には橋脚の可能性がある柱穴S P13が存在する。溝の埋土中からは13世紀後半～14世紀にかけての遺物が出土した。

柱穴S P13(第4・6図、図版第4・5) S D12の南側で検出した。直径0.48m、深さ0.49mを測る。検出面では、柱穴を固定するかのよう10～25cm大の石が縦方向に柱穴と掘形の上に詰められていた。柱穴の底面から10～12cm程は径4cm程の礫が充填され、その上面に長さ20cm、幅7cmの扁平な石が置かれていた。礎石と考えられる。扁平な石の周囲より土師器皿(第10図41)、青磁碗(第10図44)、白磁皿(第10図43)が出土した。柱穴は1基しか確認できなかったこと、石や礫で固定している点で掘立柱建物を構成しているものとは考えにくい。北側にS D12があり、その南辺がS P13の位置で護岸されていることから

橋脚である可能性がある。橋脚であれば対になる柱穴が必要であるが、護岸が延びるS P13の東側はS K11に削平されているため、柱穴は失われた可能性がある。

4. 出土遺物

溝S D01・S D05(第7図・図版第6) 1～3、5～20はS D01、4はS D05より出土した。S D01からは棧瓦とともに多くの遺物が出土した。1は須恵器杯身である。焼成は良好で、色調は灰色である。2は須恵器杯Bである。底径8.4cmを測る。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は灰色である。3は須恵器円面硯である。脚を欠損するが、方形の縦透孔が確認できる。硯面残存率は1/8強で復原硯面径は19.6cmを測る。色調は灰色で、焼成は良好である。4・5は須恵器甕である。口縁部はナデ調整で、胴部内面に同心円文の当て具痕跡が残る。5の外面には平行タタキを施す。4は口径18.3cmを測り、色調は灰色で、焼成は良好である。5は口径20.6cmを測る。6は瓦器碗である。口縁部をナデ調整し、内面にはミガキが施される。高台は断面三角形の貼り付け高台である。口径14.6cm、器高5.3cmを測る。7～10は土師器皿である。口縁部の内外面をヨコナデ調整する。10は口径15cmを測り、口縁部内外面をヨコナデし、内面はナデで仕上げる。焼成は良好で、胎土に石英・長石・雲母、茶色の砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。11・12は白磁碗である。11は口径16.2cm、12は口径16.8cm、残存高3.8cmを測る。12世紀代のものである。13は中国製青白磁の合子蓋で、口径4.8cmを測る。焼成は不良で灰釉状に発色する。14は東播系須恵器の片口鉢である。内外面ともナデ仕上げである。口径27.9cm、色調は灰色である。口縁端部は玉縁状を呈する。14～15世紀のものである。15は甕の口縁部で、胎土に長石粒を含み、信楽産と考えられる。口径32cmを測る。16・17は瓦質土器羽釜

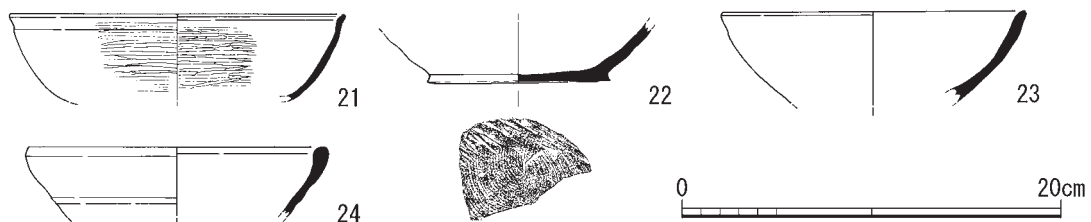


第 7 図 溝 S D01・05 出土遺物実測図

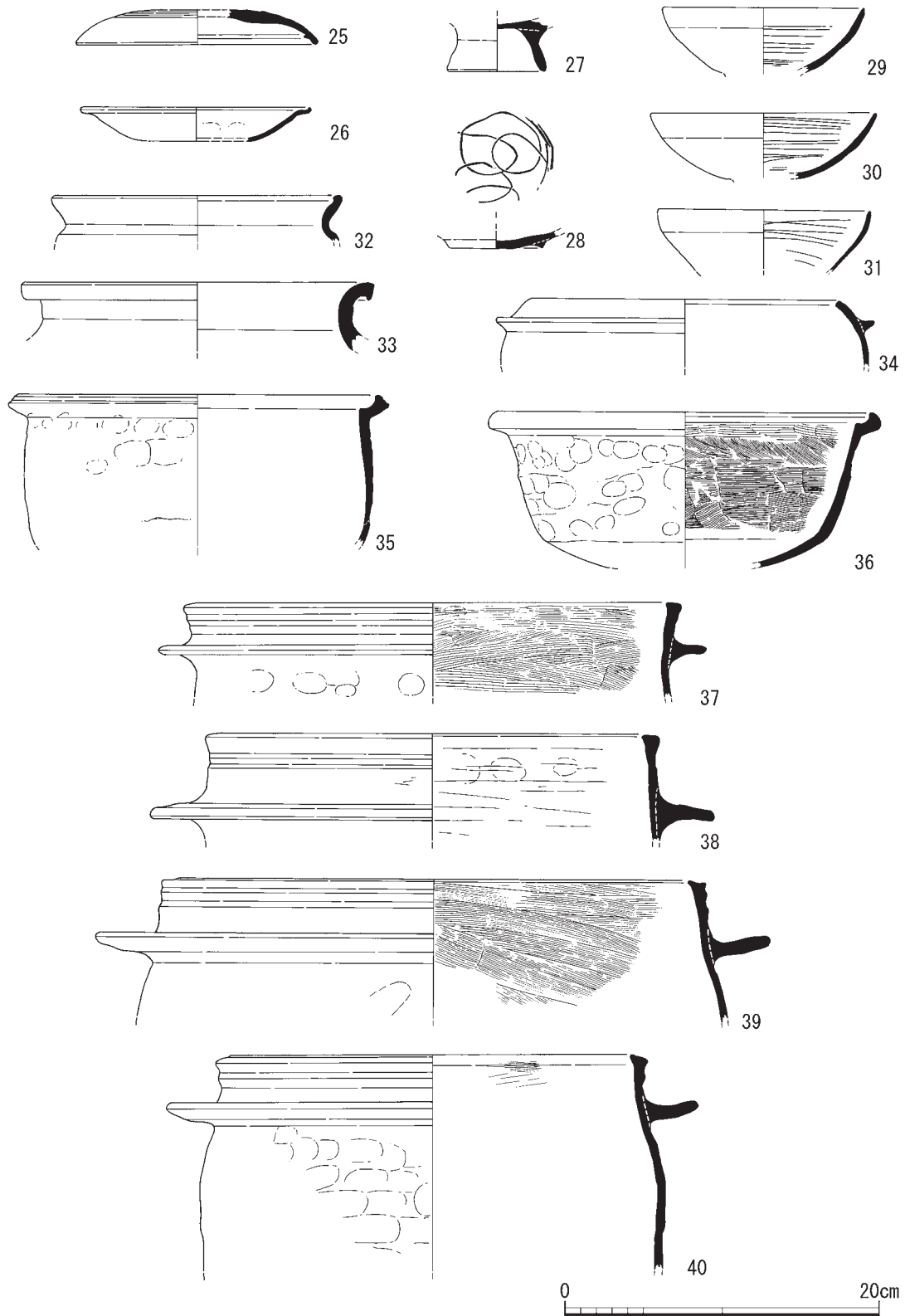
である。16は直線的な体部に水平方向に短い鏝が付く。口縁端部は断面が三角形を呈する。内面はハケ調整で、体部外面にユビオサエが見られる。焼成は良好で、胎土に石英・長石・雲母・青灰色砂粒を含む。色調は内面が灰黄色、外面が暗灰色を呈する。口径20.3cmを測る。17は内湾する口縁部で端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデで短い鏝が巡る。口径22.2cmを測る。18は須恵器甕である。底部のみ残存する。外面にタタキ痕が認められ、内面はナデ仕上げで、わずかに同心円文の当て具痕跡が残る。19・20は瓦質土器羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、ヨコナデにより外面に二段の凹線を巡らす。口縁端部は内側に肥厚する。口縁部下方には水平方向に広い鏝を巡らす。19は口径30cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整し、内面には横方向のハケ目が残る。焼成は良好で、胎土に石英・長石・雲母・茶色の砂粒を含む。色調は内外面とも灰色を呈する。20は口径32cmを測る。19と同様のものであるが、鏝から口縁端部までの長さが19に比べて長い。

土坑S K03・07・08(第8図・図版第6) 21・24はS K08、22はS K03、23はS K07より出土した。21は黒色土器B類の椀である。体部は緩やかにカーブしながら外上方に立ち上がり、口縁端部内側に1条の沈線を巡らす。内外面とも丁寧なミガキを施す。色調は外面が黒色、内面は暗灰色である。口径17.6cmを測る。22・23は須恵器椀である。22は底部片で底径9.6cmを測り、糸切り痕が認められる。焼成は良好で、胎土は精良である。色調は灰色を呈する。23は口径15.8cmを測る。24は須恵器鉢である。調整は内外面回転ナデ、色調は灰白色である。内面に煤が付着する。

溝SD12(第9図・図版第6) 25は須恵器蓋である。口縁部内側に返りを有し、つまみが付くと思われる。焼成は良好で、胎土は精良である。色調は灰色を呈する。口径15.2cmを測る。26は土師器皿である。「て」の字状口縁をもつ。焼成は良好で、胎土は精良である。色調は浅黄橙色を呈する。口径14.4cm、残存高2.2cmを測る。10世紀のものである。27は土師器台付皿の高台部分である。調整は内外面ナデ、色調は内外面ともに浅黄橙色である。焼成は良好で、胎土はやや粗く長石・石英・チャート・雲母・赤色斑粒を含む。高台径6cm、残存高3.25cmを測る。28～31は瓦器椀である。28は見込み部分にラセン状の暗文が施される。高台は断面三角形の貼り付け高台である。色調は内外面とも灰色である。29～31の外面はナデ調整、内面にはやや間隔の広いミガキが施される。口径12.6～14.2cmを測る。胎土・焼成は良好で、色調は灰色～灰白色である。13世紀後半のものである。32は土師器甕である。口縁部は内外面ともヨコナデし、内面にはぶい黄橙色、外面は灰黄褐色を呈する。口径18cmを測る。奈良時代後半のものである。33は瓦質土



第8図 土坑S K03・07・08出土遺物実測図

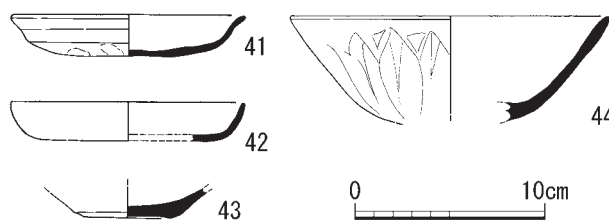


第9図 溝S D12出土遺物実測図

器甕である。口縁部は強く外反し、端部に面を形成する。口径21.6cmを測る。34は瓦質土器羽釜である。口縁部は内傾し、短い鏝が付く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部の内外面をヨコナデ調整する。焼成は良好で、胎土は石英・長石黒粒を含む。色調は灰色である。口径19.4cmを測る。35・36は瓦質土器鍋である。口縁部は内外面ヨコナデ、体部外面はユビオサエ、内面はヨコハケを施す。体部と口縁部の境で強く屈曲して口縁部が立ち上がる受け口状口縁で、端部は断面が三角形を呈する。36は口径23.8cmを測る。37～40は14世紀の瓦質土器羽釜である。寸胴の体部にやや内傾する口縁部をもち、外面に二段の凹線を巡らす。口縁端部は肥厚させて内側に尖らせ、断面が三角形を呈する。口縁部下方には水平方向に鏝を巡らす。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はユビオサエ、内面には細かいヨコハケが施される。37～39の鏝下面には煤が付着する。37は口径29.6cm、38は口径26.8cm、40は口径25.2cmを測る。色調は37が内面黄灰色・外面灰白色で、38は灰色、39は内外面灰色、40は内面黄灰色・外面灰黄色である。

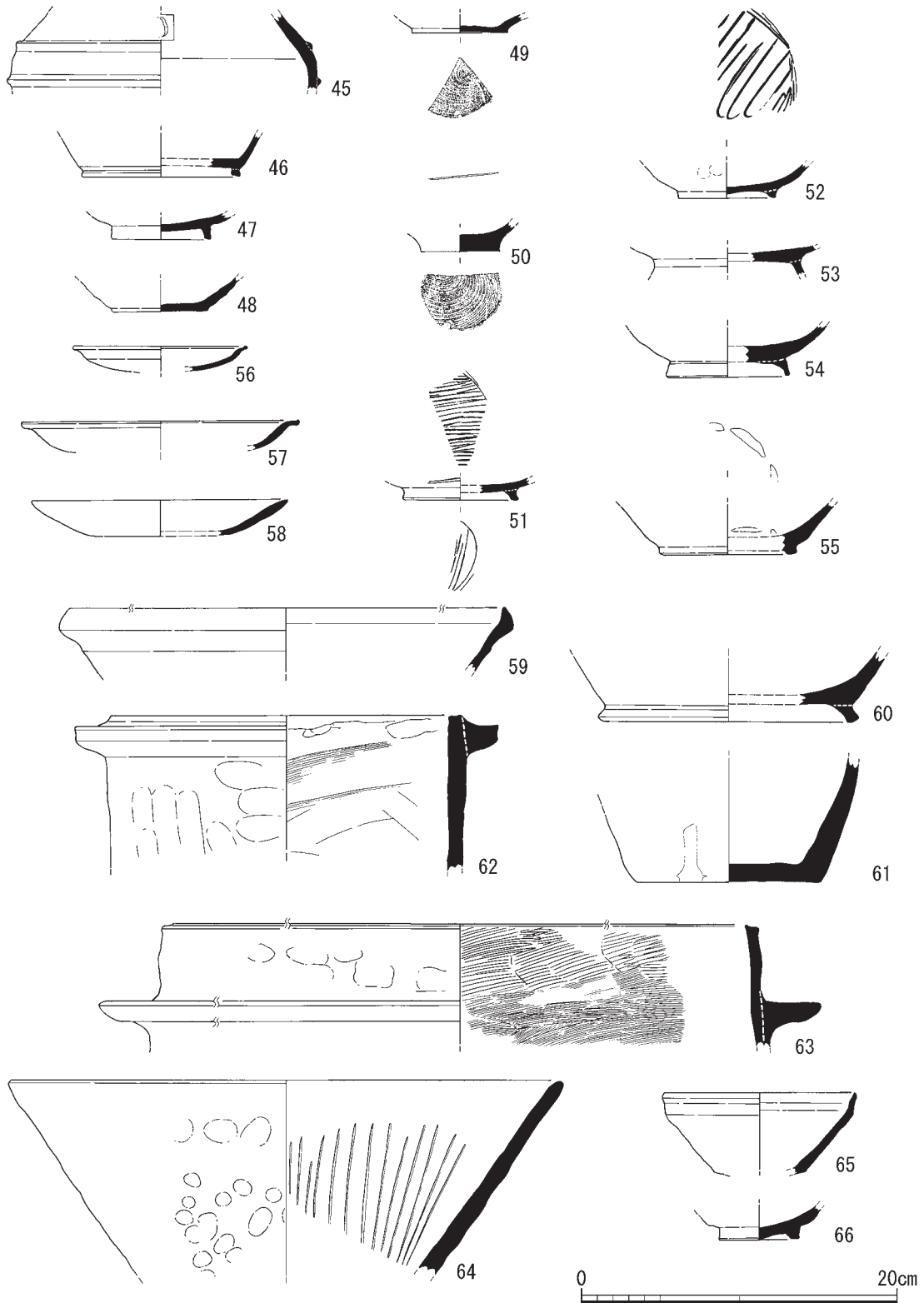
柱穴SP13(第10図・図版第6) 41・42は土師器皿である。41は完形品で口径12.2cm、器高2.1cmを測る。口縁部をヨコナデし外反させる。焼成は良好で、胎土に茶色の砂粒を含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色である。42は口縁部をヨコナデし、以下はナデ調整する。内面から口縁部外面にかけて煤が付着しており、灯明皿と考えられる。口径12.2cmを測る。43は白磁皿底部である。底径4.4cmを測る。外面は底近くまで施釉される。44は龍泉窯系青磁碗である。残存率は1/5、口径16.8cmを測る。これらの遺物は、青磁碗の特徴から13世紀中頃のものと考えられる。

包含層出土遺物(第11図・図版第6) 45は須恵器壺と考えられる。肩部付近に凸帯が上下2段に認められ、上段の凸帯付近には把手の痕跡が残る。46は須恵器杯B底部片である。焼成は良好、胎土は精良、色調は灰色で、貼り付け高台で底径10cmを測る。47は須恵器碗底部片である。貼り付け高台で、内面にミガキが施される。底径6.2cmを測る。48・49は須恵器碗で底部に糸切り痕が認められる。50は緑釉陶器碗底部片で、底部に糸切り痕が認められる。見込みにはヘラ記号がある。平安時代前期のものである。51は黒色土器B類碗の底部片である。見込みおよび底部外面にミガキが認められる。焼成は良好で胎土は密である。色調は黒色である。52は瓦器碗底部片である。見込みに暗文が認められ、色調は暗青灰色である。53は緑釉陶器底部片である。貼り付け高台で、平安時代前期のものである。54は灰釉陶器碗底部片である。55は越州窯系青磁碗の底部である。内面には重ね焼きの痕が残りに、畳付きは無釉である。10世紀のものである。56～58は土師器皿である。口縁部はヨコナデ、以下はナデで仕上げる。56・57は「て」の字状口縁をもつ。57は口径17.4cm、残存高1.9cmである。59は東播系須恵器の鉢である。調整は内外面ともにヨコ



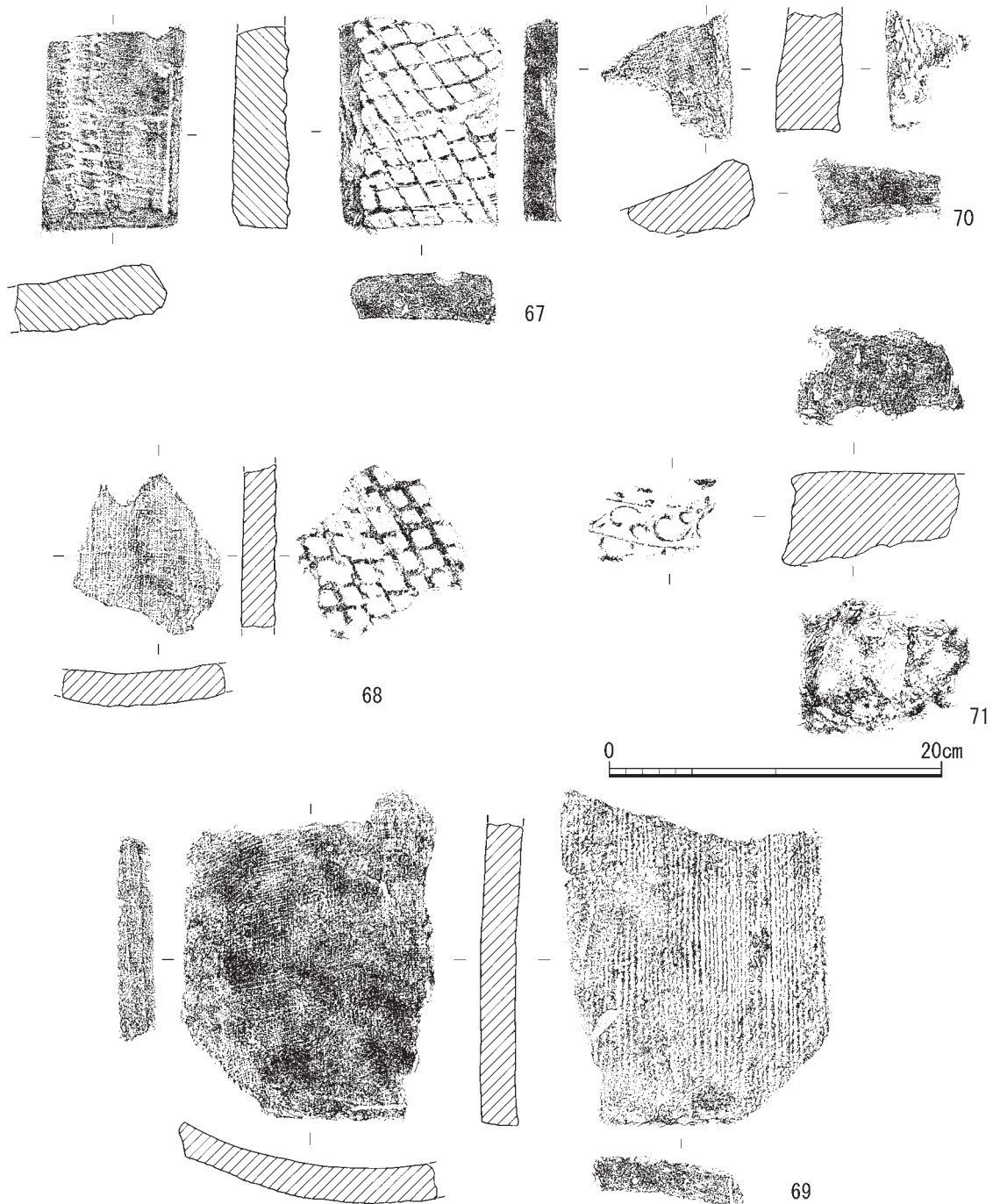
第10図 柱穴SP13出土遺物実測図

ナデで、色調は灰色である。12世紀後半～13世紀初頭にかけてのものである。60は須恵器壺底部と考えられる。60は底径15.6cmを測る。61は東播系の壺底部で、底径11.6cmを測る。常滑産の可能性もある。62は撰津産の土師器羽釜である。口



第11図 包含層出土遺物実測図

縁部は屈曲せず、口縁部のすぐ下に短く厚い鍔が付く。体部内面にはヨコハケを施す。焼成は良好で、胎土には砂粒を含む。色調は褐灰色である。63は瓦質土器羽釜である。直線的な体部に水平方向に鍔が付く。口縁端部は断面が三角形を呈する。調整は内面がハケ調整で、体部外面はユビオサエである。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調は内面が灰色～灰黄色、外面が灰色～灰白色である。64は丹波焼播鉢である。調整は口縁部がヨコナデで、外面は不定方向のナデオよびユビオサエである。内面には口縁端部下3cm以下に1条1単位の摺目が施される。口径34.6cmを測る。焼成は良好で、胎土はやや粗く長石・石英・黒粒を含む。色調は内面が淡橙色、



第12図 出土遺物実測図(瓦類)

外面が橙色である。15世紀のものと考えられる。65・66は美濃か瀬戸産の天目椀である。66はにぶい褐色を呈し、焼成は良好で、胎土は精良である。口径12.0cmを測る。16世紀代のものと考えられる。

瓦類(第12図・図版第6) 67～71は瓦である。67はS P 04、68～70はS D 01、71は包含層中より出土した。67・68は斜格子タタキを施す平瓦である。67は残存長12.5cm、同幅9.0cm、厚さ3.0cmを測る。凸面は粗い斜格子タタキを施した後、側縁部にヘラケズリを施す。凹面には細かい布目痕が残る。側面および端面は削り後ナデ仕上げする。斜格子タタキは一辺1.5cmほどである。胎土は密で、焼成は良、色調は橙色である。宝菩提院廃寺に関係すると思われる。69は平瓦である。凸面は縄タタキを施した後、端部から側面にかけてヘラケズリを施す。凹面に細かい布目痕残り、側縁部から側面にかけてヘラケズリを施す。残存長15.7cm、同幅20.3cm、厚さ2.2cmを測る。胎土は密で、焼成は良、色調は灰色である。71は均整唐草文軒平瓦である。瓦当面の大半が欠損する。下内縁に珠文が巡る。凹面は欠損している。平瓦部の残存状況からすると、顎の形態は無段と考えられる。凸面は調整不明、凹面は細かい布目痕をナデ消す。残存長10cm、同幅8cm、厚さ5.1cmを測る。胎土はやや粗く長石粒を含む。焼成は甘く、色調は灰黒色である。平安時代のものである。

5. まとめ

今回の調査地は、段丘低位面の谷筋に位置し、検出した土砂の堆積層も南西及び西方向の高い位置からの移動が認められる。当該地は谷地形の底付近に位置し、上層では、中世以降の溝や土坑・柱穴を検出し、棧瓦を含む多くの中世・長岡京期・古墳時代の遺物が出土した。S D 01-1・2は、西隣で調査された近世流路の延長部分と考えられ「はり湖池」からの水路である可能性が考えられる。また、江戸時代末期の地籍図に記載されている水路の可能性もある。

下層で検出したS D 12は東西ではなく北西方向から南東方向に流れており、谷底を流れる流路である可能性がある。時期は異なるが方向的には東側の宮跡第473次調査で検出されたS D 07に延びていく。

今回の調査地は寺戸城の北辺中央部付近に位置しているが、同城に関係する遺構は検出されなかった。

出土遺物には中世段階の遺物が多くみられ、これらには煮炊き用の遺物が多く認められることから、集落遺跡である南垣内遺跡に関するものと判断する。

また、古墳時代・長岡京期の遺物は出土しているが、遺構は検出できなかった。調査地が谷部に位置することや周辺の調査成果から、遺構は調査地の南側に存在したと想定され、後世の整地等により遺物が混入したのと考えられる。

(増田孝彦)

- 注1 松崎俊郎「長岡宮跡第241次(7AN16F地区)～北辺官衙(北部)、西垣内遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第32集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1991
- 注2 梅本康広「長岡宮跡第305次(7ANBNC地区)～北辺官衙(北部)～発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集(第1分冊) (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 2004
- 注3 梅本康広「長岡宮跡第319次(7ANBNC-2地区)～北辺官衙(北部)、一条条間南小路～発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第71集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 2006
- 注4 國下多美樹「長岡宮跡第358次(7ANBMC-7地区)～北辺官衙(北部)、宮内一坊坊間小路、南垣内遺跡～発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第53集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 2001
- 注5 中島信親「長岡宮跡第458次(7ANBMI-9地区)～北辺官衙(北部)～発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第79集 (財)向日市埋蔵文化財センター) 2008
- 注6 松崎俊郎「長岡宮跡第461次(7ANBMC-8地区)～北辺官衙(北部)、西垣内遺跡～発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第83集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 2011
- 注7 福島孝行「I 平成19年度の試掘調査〔1〕長岡宮跡第463次調査」(『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成20年度)』京都府教育委員会) 2009
- 注8 竹井治雄「長岡宮跡第473次(7ANBMC-10地区)・南垣内遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第140冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

圖 版



(1) 調査前全景(西から)



(2) トレンチ西半部全景(西から)



(1) トレンチ西壁土層断面(東から)



(2) トレンチ西半部堆積土除去後全景(西から)



(1) トレンチ東半部溝 S D01-1 近景(西から)



(2) トレンチ東半部土坑 S K11 近景(南西から)



(1) トレンチ東半部溝 S D12 近景(西から)



(2) トレンチ東半部柱穴 S P13 検出状況(西から)



(1) トレンチ東半部柱穴 S P 13
遺物検出状況 (東から)



(2) トレンチ東半部柱穴 S P 13
完掘状況 (北から)



(3) トレンチ東半部
堆積土除去後全景 (西から)

